

上げます。もちろん学生時代、影ながら(?)応援して下さった名古屋大学の先輩方、後輩達にも感謝しています。

最後に、この4月から日本原子力研究開発機構・量子ビーム応用研究部門・高密度物質研究グループ(名前が非常に長いですが)の博士研究員として働くことになりました。今まで惑星科学の世界にいた私ですが、これからは物性物理の世界にどっぷり浸かることにな

りそうです。研究テーマは未定ですが、氷のレオロジーをミクロな視点から研究していくことになりそうです。博士を取得したとはいえ、研究者としては卵の殻が割れて雛の顔が飛び出た程度のレベルですが、今後は様々な研究分野に触れて自分なりの研究が出来るように頑張っていきたいと思います。今後とも皆様、宜しくお願い致します。

小郷原 一智(宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所)

小郷原一智と申します。2010年3月に京都大学大学院理学研究科で学位を取得しました。論文題目は、「火星大循環モデルの開発とダストの拡大地域特性に関する研究」というものでした。出身研究室は、物理気候学研究室、という地球の気象、気候を扱うところでした。研究室の先生方の研究テーマは、東南アジアの降水システム、衛星観測とモデルによる雲降水の研究、熱帯対流圏の気象、など火星とはかけ離れたものです。そこへ、「火星の研究したいです」と言って、何も知らない学生がやってきたのですから、先生方は「リクルートを間違えた」と思われたことでしょう。私が物理気候学研究室へ所属してから、研究室のセミナーの話題には、台風、梅雨、日本各地の集中豪雨、竜巻などに交じって、火星のダストストームが入るようになり、バリエーションは一気に大きくなりました(外れ値がたったひとつあるだけ)。しかも、所属していた6年間のうち、4.5年を火星Hellas盆地周辺の大気現象の研究に費やし、物理気候学研究室は日本一(場合によっては世界一)Hellas盆地に詳しい研究室となったと思います。

私が3年で学位を取れたのは、2つの大きな理由があります。一つ目は、当時の研究室の自由で寛容な方針、そして二つ目は惑星科学コミュニティが溶け込みやすいものであったことです。まず、当時の研究室は、配属されてから3ヶ月間何も言われず、突然「研究進んでる？」と指導教員に聞かれるような研究室でした。先生方の居室に伺えば、どんなに忙しくても手を止めて議論してくださいましたが、伺わない限り議論も指導も気にされることもありません。しかし、だ



からこそ研究テーマを指定されることも、研究のスケジュール(つまりは締切)を指定されることもありません。したがって、自分に必要なことを順番に、ゆっくりと習得することができ、結果としてスケジュールどおりに学位が取れました。さらに、たった一人になってもとにかく研究を進める力がついたと自負しております。次に、惑星科学コミュニティが新参者にとって溶け込みやすいものであったことも、私の学位取得には大きく影響しています。地球の気象の研究室でたった一人火星大気を研究するのは、上のような環境があれば基本的に可能です。ただ、研究の最前線やミッション計画、果ては公募などの情報はまわりに関連する人たちがいて初めて得られます。当時の私にはそれらが決定的に不足していました。そこで、惑星大気の研究会には自腹を切っても必ず参加し、いかに孤独でも付随する飲み会には必ず潜り込みました。西の方にいる名もなき大学院生が研究会や飲み会に参加しても、やはりぼつんとしているだけでしたが、発表を何度も

何度も重ねるにつれて、しだいに認知していただけるようになりました。名前に読み仮名をつけるようにしたことも功を奏したと思います。そうして、最先端の火星大気科学の貴重な情報をいただくことができ、時代おくれでない学位論文が書けたと思います。

そうまでして、なぜ地球ではなくよりによって火星の気象を研究したかったのか？それは、まだまだ青い学部4年生の私にとっては（今も青いですが）、フロンティアとして最もわかりやすく手の届くものが火星だったからです。地球ではもう何十年も前から気象学が確立されていて、私などが4年生から始めてとりつく島があるのか、もうやることはやりつくされているのではないかと、思いました（もちろん、今はそのようなことは思っておりません）。当時は、もう少しで人類が到達できそうで、地球とよく似た大気現象が存在しているものの、ほとんど研究されていない火星大気は、私の好奇心の対象として最適だったのです。そ

れ以来、気象業界の人たちに幾度となく「何で火星なの？」と聞かれましたが、地球に浮気することなく今まで火星一筋に研究しております。

現在は、宇宙航空研究開発機構、宇宙科学研究所で、Planet-Cプロジェクト招聘研究員として、金星探査機あかつきの高次データ処理の仕事をしております（あら？）。惑星大気研究者の皆様に、金星雲追跡によって求められた風速データを活用していただくため、日々プログラミングに励んでおります。金星大気の研究も楽しくなってきましたが、将来もし日本の火星探査が実現するならば、ぜひぜひかかわっていきたくも考えておまして、どっちつかずの浮気的な人間です。今後は、火星研究者の方のみならず、金星研究者の方にもお声をかけていただきたい次第です。最後に、まともな文章を期待されつつ最後まで読んでいただいた方々に、厚く御礼申し上げます。

黒田 剛史 (JAXA宇宙科学研究所)

遊星人をご覧の皆様、こんにちは。黒田剛史(くろだ たけし)と申します。現在学振特別研究員(PD)として、JAXA宇宙科学研究所とドイツのKatlenburg-Lindauという田舎にあるマックスプランク太陽系研究所(Max Planck Institute for Solar System Research)とを行き来しつつ研究を行っています。この原稿の執筆地点ではKatlenburg-Lindauに滞在中で、菜の花畑が一面に広がる中でこれを書いています。

ここKatlenburg-Lindauに住み始めたのは博士課程在学中の2004年4月で、通算で約6年もここにいることとなります。人よりも牛のほうが多いなんて言われているくらいのどかで退屈なところですが、研究者や学生は世界各国(北米を除く)から集まっており、インターナショナルな雰囲気です。研究所では英語しか使わないため、ドイツにもう6年も住んでいるのにドイツ語は一向に喋れるようになりません(笑)。

私は火星大気モデリング研究を行っています。それを始めたのは学部4年生の時の特別演習で、その時から修士・博士を通じて、東京大学気候システム研究センター(CCSR、現・大気海洋研究所)の高橋正明先生のもとでお世話になりました。私はCCSRで地球



以外の大気の研究を行った最初の学生として、CCSRと国立環境研究所(NIES)にて共同開発された地球大気の大循環モデル(CCSR/NIES AGCM)を火星環境に作り替えた火星大気大循環モデル(Martian General Circulation Model: MGCM)の開発に取り組みました[1]。乾燥大気のみを考慮すればよい点では地球の対流圏よりシンプルといえる一方、CO₂の凝結による大気量の変化など火星独特の物理過程もあり、またGCMに慣れるまではその膨大な量のプログラムを前に自力でのバグ取りもままならず、研究室の優秀な先輩方(現